街のオアシス 再発見 第13回

赤れんががシンボル　道庁（札幌市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

北海道の行政を担う札幌市中央区の北海道庁は、開拓使時代から通算すると、2度の火災に遭っています。赤れんが庁舎（旧本庁舎）も内部を焼失しましたが、修復、補修を繰り返し、明治の面影を伝える観光施設になっています。

前庭には防火用水として掘ったといわれる池が南北にあり、その周囲にはポプラやイチョウ、ハルニレなど数多くの樹木が植えられています。

近年、周りに高い建物が立ち並び、ビルの谷間のようになりましたが、都心の数少ない憩いの場であることに変わりはありません。特に新緑の5月は、サクラやツツジなどが咲き誇り、1年で最も美しいシーズンです。

池の縁を彩るズミ

5月中旬、南門から入り右手の池のそばに行くと、ズミが白い花をたくさんつけています。樹皮を黄色の染料に使うので「染（そ）み」、または実がすっぱいので「酸実（すみ）」が語源になったといわれています。

バラ科で別名コリンゴ、コナシともいいます。北海道から九州にかけて、日当たりのいい丘陵地に分布しています。かつてはリンゴを接ぎ木するための台木（だいぎ）として利用されていました。

同じ仲間で道内に自生するエゾノコリンゴは、白い花も赤い実もよく似ており、一見すると区別がつきません。ズミよりもエゾノコリンゴの方が花の柄がやや長く、実もやや大きいのですが、見分ける最大の特徴は葉です。エゾノコリンゴの葉はみな同じ形をしているのに対し、ズミは切れ込みのある葉が交ざっています。

サクラが散った後に咲きだし、庭園内に彩りを添える木です。春の花も秋の実も美しいことから、観賞用として各地の公園などに植えられています。

屋根が葺（ふ）き替えられた赤れんが庁舎

白い花が間近で見られるズミ

白雲のようなハクウンボク

道庁南側の北２条通に植えられているのがハクウンボクです。５月下旬から６月上旬にかけて、白い花が一斉に咲きだします。それを白雲に見立て、白雲木という名前が付けられました。

北海道から九州にかけての山地に自生しています。下向きに咲く白い花はエゴノキとよく似ていますが、数個ずつ花を付けるエゴノキに対し、ハクウンボクは20個ほどが横に連なっています。

美しいのは開花時だけではありません。花が散ると樹木の周りの地面が真っ白になり、まるで雪が降ったような光景です。

葉は卵円形で長さは20㌢にもなります。これほど大きいと虫が身を包み、隠れるのに好都合です。オトシブミという虫は葉を巻き、揺籃（ようらん）と呼ばれる円筒形の巣をつくり、この中に卵を産みつけます。円山のスギ林に行くと、葉が巻かれた状態のハクウンボクを見ることができます。

街路樹として市内で最初に植えられたのは北５条通の西11～19丁目間。並木を作ってほしいという女子小学生の投書がきっかけで1977年に植樹されました。今では市内各所に植えられ、人々の目を楽しませています。

花の量が圧倒的なハクウンボク

歴史ある並木道

道庁を中心に東西に延びる北３条通は歴史のある並木道です。

正門から東側の駅前通までの街路樹はイチョウです。1924年に札幌で初の舗装工事が行われ、車道は木れんがと称する木塊（もっかい）、歩道はアスファルトを敷きました。

翌年、歩道に植えられたのが、東京から取り寄せたイチョウです。植栽した32本は１世紀を経て29本になりましたが、現存する市内で最古の並木として市民に親しまれています。この植樹で余った苗木が赤れんが庁舎の前庭にも植えられ、今では並木以上の大樹に成長しています。

一方、道庁と西側の北大植物園を結ぶ道路には19本（うち３本は昨年植え替え）のアカナラが立ち並んでいます。北米原産で高さ20㍍以上になるドングリの木で、葉に大きな切れ込みがあるのが特徴です。

1891年、米国のハーバード大学付属アーノルド植物園から北大植物園に種子交換で送られたアカナラの子孫です。植物園で採取したドングリを苗木に育て1932年、道庁―植物園間に植えられました。

寒さに強いことから、街路樹として市内各地に植樹されています。別名はアカガシワ、英名はレッドオーク。この名の通り、秋になると葉が赤く紅葉します。

道庁東側のイチョウ並木

しかし、市内の大半はカシワやミズナラのように褐色になり、赤い葉はめったに見ることができません。

道庁西側のアカナラ並木

焼失した開拓使本庁舎

開拓使が北海道開発の中核となる札幌本庁舎を建設したのは1873年10月。開拓使の最高顧問、ホーレス・ケプロンの指揮で建てられました。

現在の赤れんが庁舎の北隣に位置し、左右対称な米国風ジョージア様式の２階建て下見張りで、白ペンキが塗られ、中央にはドーム状の塔がそびえていました。

庁舎の周囲には、北海道に適した果樹を選定するため、ナシ、リンゴ、モモ、ブドウなどが植えられました。

悲劇が訪れたのは1879年１月17日。庁舎の煙筒部分から出火し、瞬く間に燃え広がりました。普段東京で執務をしている開拓長官の黒田清隆（くろだきよたか）は、この冬初めて札幌で年越しをしたため、庁舎が炎上するのを目の当たりにします。

消防夫や役人のほか、屯田兵や札幌農学校の生徒らも駆けつけ、消火や書類の搬出に当たりました。札幌監獄では当直が囚人を外に出し、消火活動に向かわせました。しかし、札幌の象徴である白亜の館は、建設からわずか５年余りで消え失せました。

この責任を取り本庁主任の調所広丈（ずしょひろたけ）は月給100円の減俸処分を受けます。また、囚人は消火に尽力したとして罪一等を減じられますが、監獄の役人は独断で出獄させたとして罷免されました。

完成した白亜の開拓使本庁舎
（1873年、北海道大学付属図書館所蔵）

道庁本庁舎も炎上

庁舎焼失後、開拓使は廃止され、札幌県を経て1886年、北海道庁となります。同年７月、新庁舎の建設が始まり、完成したのは２年後の1888年12月です。

ネオバロック様式で、外壁には赤れんがが使われました。設計主任の平井晴二郎（ひらいせいじろう）は米国留学の経験があり、当時の建築様式を熟知していました。美意識にこだわったのに加え、開拓使の本庁舎が焼失した教訓から、耐火性が高いことにも着目したのでしょう。

平井はお雇い外国人ジョセフ・クロフォードのもとで、北海道初の鉄道、幌内鉄道の敷設に携わり、れんが造りの旧手宮機関車庫（1885年竣工）を設計しています。煙を出す蒸気機関車に対応するには、燃えにくい構造にすることが大前提でした。

立派な庁舎が出来上がったものの、次第に狂いが生じ、風で揺れ動くようになります。原因として挙げら

れたのが、上部に据えた八角塔でした。上からの負荷を軽減するため、八角塔は1896年に撤去されます。なぜそんなことになったのか。当初の設計にはなかった八角塔が、北海道庁長官、岩村通俊（いわむらみちとし）の指示で増築されたからだといわれています。岩村は開拓使に大判官として1873年１月まで勤めていました。

開拓使本庁舎は1872年７月から工事が始まり、完成するのは翌年10月です。岩村の離任後ですが、少なくとも在任中、八角のドームが据えられた図面は見ていたはずです。

そして、北海道庁の初代長官として赴任するのが、北海道庁本庁舎着工５カ月前の1886年２月です。岩村は八角塔を加えることで、自らがかかわった開拓使本庁舎を再現したいと思ったのかもしれません。

八角塔が撤去され庁舎は安全になったものの、今度は火災に遭遇します。1909年１月11日夕、地下の印刷室から出た火は、暖房配管の木製カバーを伝って最上階の書庫に達し、そこから下層へと燃え広がりました。

消防隊が手押しポンプで消火に当たりますが、厳しい寒さのため、ホースが凍結。池には氷が張り、防火用水の役目を果たしません。池の氷を割り注水したものの、凍傷を負う消防夫が相次ぎました。

火は翌朝ようやく消し止められましたが、内部は全焼し、れんがの壁だけが燃え残りました。

八角塔の復元は

庁舎の復旧工事は1910年から始まり1911年に完了します。焼け残ったれんがに新しいれんがを継ぎ足し、防火と防寒に重点が置かれました。

各階の廊下には防火扉を設け、窓は内側の窓が折りたためる二重窓にしました。緊縮財政だったこともあり、実用重視の観点から、外観上、余計な装飾が取り除かれました。八角塔も復元されることはありませんでした。

それから半世紀を経て、道が新本庁舎（1968年竣工）を建設するのに伴い、赤れんが庁舎を1888年の完工時の姿に戻し、永久保存することが決まります。

復元されることになったのは、旧庁舎を象徴していたドーム状の八角塔（基部から搭頂まで18㍍）、南北の脇玄関、屋根から突き出ていた18基の換気塔、西側にあった２基の独立煙突などです。

工事は1968年10月に終え、八角塔は約70年ぶりに姿を現しました。そして1969年、赤れんが庁舎は国の重要文化財に指定されます。

2022年からの改修工事では、八角塔の銅板屋根が葺き替えられ、経年変化で緑色だった表面が本来の赤褐色によみがえりました。札幌のシンボルは今年７月25日から再び一般公開される予定です。

新築された赤れんがの北海道庁本庁舎
（1889年ごろ、北海道大学付属図書館所蔵）

火災後に復旧した北海道庁本庁舎
（1912年、北海道大学付属図書館所蔵）